

炎天に雪ふるごとく

ガンと斗った13才の
少女と一家の記録

田原千

ガンと闘った13才の少女と一家の記録

炎天に雪ふる
ごとく



田原千輝

鳩の森書房

著者略歴

田原 千暉（たはら ちあき）

1942年病倒、1946年俳誌創刊、「石」主幹。

第一句集「車椅子」（現代書房）、第二句集「合図」（石叢書）、「現代俳句全集」第三巻所収（みすず書房）。

新俳句人連盟中央委員。現代俳句協会・九州俳句作家協会会員。日本民主主義文学同盟員。原水爆禁止大分市協議会会長。大分自然を守る会理事。

炎天に雪ふることく ガンと闘った13才の少女と一家の記録

1973年4月発行

定価 950円

著者 田原千暉

発行者 道本裕信

発行所 鳩の森書房

東京都文京区小石川5-6-21

電話 (03) 944-6730

印刷 開明堂東京支店

カバー 中部印刷株式会社

0095-6083-6936

ガンと斗った13才の少女と一家の記録

炎天に雪ふる
ごとく



森書房

鳩の森書房

目次

訴え 7

ガンよ、わたしは負けない 20

葉を求める 36

作子の日記・脱出 48

ガンの枯尾花をみさだめて 62

コンフリーの葉 82

中学生の手紙たち 90

万羽鶴 108

光と影 125

生命の絆 140

新しい出発 156

友情というもの 173

人間の世界 185

東京―大分 207

花でもこんな
に 224

肺が痛む 245

油絵をかく 255

青葉木菟 265

七月六日の朝 272

ひまわりの花 285

へんじをまっ
ている 299

作子蟬 309

青い麦の畝 321

あとがき 329

昭和四十三年二月十九日（夕方）

星の世界には自由がない。

人間の世界には自由がある。

星の世界には喜びがない。

人間の世界には喜びがある。

星の世界には悲しみがない。

人間の世界には悲しみがある。

星の世界には死がない。

人間の世界には死がある。

今、私は人間である喜びと悲しみを

同時に味わっているのです。

〈田原作子の詩から〉

訴　　え

拝啓、私の考えている政治中央・医学界・日本の内外をとわず頭初の貴下に、この手紙を読んで頂きたいと心からお願ひするものでございます。

私こと四十四才、戦争末期十九才のとき突然脊髄炎で倒れて、以来下半身不随・歩行不能となりましたが、戦後すぐ俳句雑誌を興し一貫してその発行を続け石発行所・石の家と世間にいわれて、いまは大分市高砂町3番地26号の借家に住んでいます。妻は四十三才、志を同じくし、ただいまの生計はタイプ印刷などをもってしています。三人の娘があり長女中学三年生、次女中学一年生、三女小学五年生、いずれも健康にして、金銭の苦しさ以外はうれいなくかしましく、日々を希望とたたかひのごとく暮らしておりました。なかなしく身体障害者の父親たる私は三人の子等のたくましく未来にはげまされて奮闘しておったものであります。妻もまた生命を生み生命を守り育てるというねがいの婦人の運動や教育・平和のための活動に身を割く日々でありました。

ある日―昭和四十二年十月二十三日、突然、魔の神が私の一家におそいかかりました。

次女作子（十三才）が左大腿骨骨肉腫の診断をうけ、即日県立病院に入院、同時に命が危ないという理由で大腿部切断を言い渡されたのであります。私たち夫婦はこの驚がくと暗たんたる失意から、すぐ立ち上りました。覚悟をし、準備をすすめたものの、子供が教科書を携えて入院したあと、担当医師の諒解を乞うて翌日、市内日赤病院の外科部長清水医師、整形外科部長佐々木医師の科学者らしい誠実な診断を得ました。結果はリアルに全く同じものであります。すでに初日、私ども夫婦は現実をきびしく受けとり、科学的に対処して生きること、不具になっても、考えることで何かを創ることも出来る、親子団結してがんばることを誓い、意志統一したのであります。したがって脚を切断しても命はある、一命を守るために切断するのだという自明の理を心の拠りどころとしつつ、それでも私自身は本能的に俳句人としての意識に低迷しつつ「賜^{たま}ききそこね^{おやこ}父子二代の不具一生」か、といった文句をつぶやき慟哭しながら、所要の街を車椅子で走りまわったのでした。

ですが、日赤診断の結果、私たちはさらにあたらしい生命に関する重大なショックを与えられたのでした。医師は、大腿部切断のことを両親から説得すべし、あなた方ならできる、というのです。思えば三日前、膝がしらの不愉快な腫れに本人と家族がはじめて気づき、サロンパスでもはっておくこととして翌土曜日は登校したのです。日曜日をはさんで月曜日朝の診察、診察がすんだら登校する構えのカバンを携えた、十三才、一六〇センチ、五一キロの、つい数日前まで「私の脚のスマートさ

よ」とマネキン嬢よろしくきりきり廻いをして誇ったわが少女に、如何にして切断を説くか。寝台車で作子は鉛いろの表情をしている。一点を見つめている。時間がない。予定の手術日をあと三日にひかえている。

私たち夫婦はさらに深い覚悟をいたしました。十月二十四日正午すぎです。

半日たちました。この半日の判断と行動は無駄を承知のうえで、この理不尽な悪魔のしうちからのがれる道のないことを知りながら、本人に心残りのない納得を、親の最善を、周囲の善意を一つにして私たちは暗い暗い秋の星の下を福岡市へ走りました。県立病院清水整形外科部長のやさしい理解と二十五日中（一日間）の日程のもとに結論を得て戻られるようとの条件つきで、九州大学病院の診断を受けたのであります。

九大整形外科山本助教授の診断と結論は、厳粛に、同じものであります。

私がかつて二度の入院で希望のもてる宣告を受けたことがなかったと同様、否、作子の場合、二年以上は生きないであろうことを保障されて、親子して搬ばれ担がれ医学の塔を出たのです。

え

訴

昭和四十二年十月二十七日午後三時～五時半、私のすばらしい娘田原作子は左大腿部付根から切断されました。執刀、大分県立病院奥苑医師。切ってみて、レントゲン判定より内容は悪いということでありました。如何なる思いやりか日赤、九大とも骨盤から落すといわれたのに、脚の付根が少しで

も残るとは、これは悪魔に対する善魔の慈悲でありましょうか。

十月二十八日、秋晴れ。私は私を負ってくれていた娘の脚を火葬場に運びました。一切は現実となりました。今日からはまぎれもなく私どもの期待を大きくしていた少女はいっぱん足の作子となりました。しかもその日から、九大で宣告された「切断しても余命は最高五年以内」という言葉があたらしく脳裡にこびりつく日の始まりとなったのです。作子は、生命を守るために脚を断ったのだと信じ、あたらしい人生が始まったのだと強く思っているのです。彼女は王子中学校生徒会の書記へ年生の立候補として推されている時に入院しました。九大まで寝たままの旅をして帰ってからついに立候補を友人に代ってもらい、手術が終わってから自分も病院から投票をしたようです。手術の前日、切断の宣告をうけて少々泣いたということですが、まもなく心を定めた表情で、手術室の中へと消えていったのでした。

これが私の見た、五体の揃った作子の最後の姿なのであります。

（「作子二百五十八日の記録」(一)から）

人並み以上すぐれた体格と健康―とばかり思っていた少女―私の娘の、病魔の発見・入院・手術―切断の五日間は、まさに悪夢そのものでありました。私たち夫婦も、幼ない姉妹も、近親も、親しい友人たちも、この降ってわいたような災難をどのように受けとめてよいかわからないという嘆きの連

続の五日間であります。

これだけ明らかな現実の裡にありながら、そして既に足いっぽん失った娘が、全体の苦痛と「亡い脚」の幻覚痛にさいなまれて、今日もなお、私は、純乎の少女が五体を切断され、さらに命を奪われるという不運をなかなか肯定することができません。私の車椅子に乗って育った作子よ、悪魔につれられて何処へいくのか。

作子というのは、私どもが催した第一回大分平和作品展（昭二九）の準備会の真っ只中に生まれたので、そのとき出来上ったばかりのポスターの中から「作」の字をとって命名した子であります。保育所時代から鼻をふくらまして絵をかくことに熱中した。幼ない姉と青年たちについて平和集会の野にも参加した。小学生の頃は子どもを守る会ひまわり班の班長であった。中学に入ってから国際力メラマンになるという希望を定め、写真部に入り、初めの夏休みは単身大阪にアルバイトの旅もした。ガリ切りをし、ミシンをかけ、本箱を作り、帽子を編むことにも夢中であった。積極的に楽天的で、家業にとっても貴重な労力でした。だから身体不自由の私にとっては武器であり盟友のような存在でありました。音楽も空も冗談もみんな吸いこんで生きて大きくなっていくように、すべてが彼女のためにあるような少女でした。だから私を負ってくれた足とともに彼女の未来が無であるということは考えることができません。そんな悪魔のいたずらを許すことができないのです。

人もまた交通事故ならその不運も納得がいくという。目的意識をもったベトナムの少女の不幸とも

ちがう。毎日々々何千何万という人々の、乙女の脚が街にうごめいている。同じ中学生たちが大分市だけでも何千人という、そのなかで、生きていることが、学校に行くことが面白くてたまらなかった少女の作子に、選りに選ってただ一人の作子にどうして悪魔の死刑の宣告がなされるのか。

私は今は、ひとりの少女、または私の娘のどれかが病弱で死ぬということの憐れさ、不憫さとはちがった意味で、未来にかぎりないあこがれを持ち、かぎりなく己の髪と足を愛した特定のたくましくすばらしい少女の死を否定して絶叫する。もしも妻の死にあえばせめてその想い出に生きることでもできるであろう。しかし私より長い未来の、未来は私たちのものであると誇った少女作子の過去の風景にどうして私がひたることができようか。数々の未来と大人たちのためにすら奉仕してきた少女の瞳にうつった電柱や空が、私だけに残るといふのはあまりに暗黒の季節ではないか。一家の活気の柱を失なうその幼ない姉よ、妹よ、母よ、私よ、何で彼女の鞆とスカートと靴だけが突然遺されねばならぬのか。

人はまたいう、何という因果であろう。親がまれな奇病で足を病んだのに、その子がまた親と何の関連もないまれな奇病で足を奪われるとは。仲間はまたいう、生活破壊の犠牲であると。私たちは働き、会議をし、子供たちはラーメンをつくって食べるという夕餉の日々。それならそれで原因があつてほしい。萎えた私の足をもんではくれた作子よ！あまりに非論理的ではないか。平和の日のための全てが！

水害浸水のために大活躍したのも一年まえの秋―そのために改造して出来た五つある食卓の椅子も今より四つ。これからわが家十本の足も九本―はたらく足は七本。失なうべく―この足うごく―とは母は生まざりき。子を破壊する命とは育てざりき。九大の宣告をうけて赤い夕日の飯塚平野をかえるときの私の脳裡に「昔、作子という子がいたな!」と想い出す日のくる未来をふり切りふりちぎりはしたが、ついにその作子の脚は切断された。彼女が知っているこの町の秋の夕べの赤い雲よ!もうあきらかに彼女の瞳をうつまなくなるではないか! 私は慟哭し、仕事をつづける。ふっと手が止まる。私の四囲の壁は牢獄のように堅い。作子から手紙がきた。

お父さんへ

手術をしてもう四日たちました。けいかがとてもいいそうです。足のキズもだいぶいたくなくなりました。

きょう、足にしていたゴムをとったのでだいぶ楽になりました。

あんまり心配しないで下さい。

ごはんも少しずつたべる気になったので安心です。

いつもいつもいろいろな人から御見舞のお菓子などもらってありがとうございます。みんなによろしく。

私はだいぶ気分がよくなったのでいいです。

一日がとても長いのでたいくつです。テレビをもってきて下さい。

足を切ったことは病気だからしかたがありません。かえって好きなことができるのでいいかもしれませんね。

お父さんをはじめ共子ねえちゃん、直子、ミー公にも元気だといって下さい。毎日おみまいにきてくれる人にも心配しないように……。

お父さんがあまり心配するから共子ねえちゃんが困っています。いつか病院にきて下さい。

さようなら

十月三十日 作子

（「作子二百五十八日の記録」(二)より）

私たちは、私たちの生活のカルテに「骨肉腫」（癌）というものがなかった無知をあまりにも驚きかなしむ。私自身が作子とともに日赤の診断で「癌よりも悪質です」と聞いたときのショックはぬぐい去るべくもなかったが、わが子と行動した短時日の経験で、急速にそして絶望的な恐ろしさでわが子がいけにえとの思いをふかめるばかりでした。しかも、奇しくも九大まで行ったその日、私の兄の家で、杉本文夫君というあまりにも優秀な少年が雄々しき苦斗のすえ宿命のごとく短い人生を終った記録（サンデー毎日10月29日号）を見たのです。読めば読むほどあまりにもよく似ている。人並み以上の体格も、生きてしまわむ意欲といい、そして、けなげな態度で左腕切断の手術室に入ったという